慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	危機の現代批評 : アメリカ解体派について
Sub Title	
Author	巽, 孝之(Tatsumi, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.207- 224
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0207

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

危機の現代批評

——アメリカ解体派について(1)——

巽　孝之

書物が織物と化したのは、ポスト・ロマンティシズムの文学意識が十九世紀末期より今世紀前半、所謂モダニズムとして開花して以来のことであったろう。そしてそこにおける自律的作品観——作品は作者に従属すべき書物ではなく、作者を含む一切の外的条件に左右されずそれ自体で成立している織物と捉える見方——が、仕掛人T・S・エリオットを得てアメリカ新批評(ニュー・クリティシズム)を導きだし、一種の文学革命として機能しつつ、実際、I・C・ランサム、アレン・テイト、ロバート・ペン・ウォーレン、クリアンス・ブルックス、R・P・ブラックマーといった後世に残る批評家たちを生みだすことに成功した事実は、既にいかなる文学史にも記載されている。

だが、一九三〇年代以降隆盛を誇ったアメリカ新批評も、一九六〇年代後半より、更に新しい波に突き崩され始めた。時期同じくして同傾向の方法論を、構造主義の援用でより精密に開拓していた欧州諸批評——ロシア・フォルマリスム、フランス新批評(ヌーベル・クリティーク)、ドイツ解釈学派——の「文学の科学」が甚大な影響をふるいだすからだ。

本稿で書きとめておきたいのは、かような状況下のアメリカ現代批評が一九六〇年代から七〇年代、更に八〇年代を迎えてどのような歩みを進めてきたか、その足跡と展望である。新批評以後、すなわちモダニズム以後の時代

とはいうものの、初期に属するぶんには、欧州諸批評、隣接諸科学の刺激も最終的には新批評的方法論自体の深化を図る滋養として摂取され、発展解消させられていった感が強い。けれども、名実ともに構造主義以後となった現代世界にあって、そもそも新批評的方法論の立脚点そのものが根こそぎ覆されようとしている。それがそっくり、現代批評方法論一般の解体／再構成になるものかどうか——まさしく解体批評（deconstruction）と命名された主流の一つを検討することで、今日の批評の実像に、いささかなりとも肉薄してみたいと思う。

1　新批評から解体批評へ

モダニズムをポスト・ロマンティシズムの一つの帰結と見るのには理由がある。モダニズムとは——詳説はここでは避けるが最低限——世紀末から第一次世界大戦に至る過程での意識の変化、すなわち荒地状況に対応せんとする秩序志向としての審美主義だったわけだが、その遠源には、まさにエリオットに明らかなように、カント、コールリッジと続く極めてロマンティックな芸術有機体説の伝統を持つためである。これが新批評にも反映して自律的芸術作品の概念が誕生するのだが、その背景には、作品をいわばロゴス（起源、話し言葉、神の悟性、無限の理性、人間の理性、論理性、合理性、また人間理性の一型態たる意識といった、一様に形而上的真理の下へ収束する諸概念）の充満せる本体論的実体言語的構築物とみなし、その立場から批評には作品の複合性（ヘーゲル的に言う弁証法的統一性）をもたらす詩的機智（テンション、アイロニー、パラドックス等）の追求を通して究極的には教育的な目論見としても成功してゆく途を期待する素地があった（なぜなら批評とは、とりもなおさず学生が文学解釈の訓練をする場であるから）。要するに、元を辿れば新批評とは、ピューリタン的聖書直解主義をしっかりふまえている点で、実にアメリカ的な産物だったと言えよう。

ノースロップ・フライ（Northrop Frye）は、右の新批評的形式主義を継承しつつ批判的に発展させた人物である。わけても彼の『批評の解剖』（*Anatomy of Criticism*, 1957）は、構造主義の介入で体系化した深層心理学や文化人類学の成果を最大限応用して神話批評の金字塔を打ち立てている。しかしそれが即、新・新批評とならないのは、フライに至ってもやはり、彼の『世の精神』（*Spiritus Mundi*, 1976）、『世俗的聖書』（*The Secular Scripture*, 1976）、『大いなる法典』（*The Great Code*, 1982）が示すように、あくまで聖書的予型論（ビブリカル・タイポロジー）とロマンティシズムを基幹とするロゴス信仰が根強いからだ。神話への信頼が表わすとおり、フライの文学宇宙は起源に基づき完全な秩序を築こうとするものである。ということは、素朴な構造主義特有の閉鎖的・静止的な時間空間になる運命を免れ得ない。だから、フランク・レントリッチアがいみじくも『新批評以後』と名付けた研究書の中で『批評の解剖』を「詩学的伝統の究極的到達点」であると同時に「かような伝統へのポスト・モダニスト的反応を今後待ち望むもの」と位置付けたのは、実に適切であった。[2] 畢竟するところ、フライは新批評を構造主義で補うことで、新批評以後、構造主義以後を決定する礎石ともなったのである。

こうして、フライ支配の下にあったアメリカ現代批評は一つの峠を越し、一九六〇年代に入る。ここで見逃がせないのが、一九六〇年代中葉の危機だ。

ジョンズ・ホプキンズ大学にて一大シンポジウム「批評の言語と人間科学」が行なわれたのが一九六六年。この場で、当時未だ国際的名声を博する以前にあった元祖・解体主義者、ジャック・デリダが初めてアメリカ批評界に登場、「人間科学のディスクールにおける構造、記号、戯れ」なる論文を読んだ。それが当時、未だ吟味不充分だったソシュールを徹底批判し、かつフライ以後の主流となりつつあったジョルジュ・プーレ（Georges Poulet）に真向から対立し、構造主義以後の到来を高らかに叫ぶものであったため、後述するイェール大学解体派に大いなる

衝撃を与え、その年の内に『イェール・フランス研究』(*Yale French Studies*)が発刊、一九七二年創刊の『バウンダリー2——ポスト・モダニズム文学研究誌』(*Boundary 2: A Journal of Postmodern Literature*)に先鞭を着ける。ここでデリダが試みたのは、ソシュール以降の構造主義で抱かれていた「中心」があって「構造の構造性」が保たれるという観念を粉砕し、同時にその「中心」をこそ最後のよりどころとしていた新批評的伝統における「ロゴス中心主義」(logocentrism)へ異議申し立てを行なうことであった。言語にはもはや還元されるべき同一性などありえない。差異性のみがある。新批評的な有機体説は解体され、目的だった「教育性」も今やニーチェ、ハイデガーに根ざす「戯れ」に代替される。言うなれば、本来構造主義の神託だったソシュールが構造主義以後の文脈で非神話化されたのであり、その結果、ヘーゲル的「弁証法的統一化」の理念がデリダ的「解体的差異化」の方法で転覆させられたのだ。衝撃は大きかった。この後、アメリカ批評界にぞくぞくとデリダの翻訳がもたらされ、一九七〇年代の主流を形成していった事実に目をやるならば、その衝撃の程度は推して知るべしだろう。

いや、アメリカ国内に留まらない。何より重要なのは、翌一九六七年をはさむ総帥ロラン・バルト自身の変容に、デリダが一役買った事実である。具体的には『モードの体系』(*Système de la mode*, 1967)から『S/Z』(S/Z, 1970)への変容に象徴される構造主義から構造主義以後への変容、と言ってよい。バルトその人がデリダ流「差異」理論の援用に関して明言してもいる。ヴィンセント・リーチに従えば、かようなバルトの変容には、マルクス主義文化批評(歴史・真理を扱う。マルクス→サルトル→ブレヒト)から記号学的構造主義(妥当性・真理を扱う。ソシュール)、更にテル・ケル解体批評(部分的テクスト性・散種を扱う。クリステヴァ、デリダ、ソレルス)、ひいては官能的解体批評(無限テクスト性・快楽を扱う。ラカン、ニーチェ)に至る道筋が読みとれるのである。

2　アメリカ解体派の確立

俗に「イェール・マフィア」とすら渾名される批評家たち――デリダの他、ポール・ド＝マン、J・ヒリス・ミラー、ジェフリイ・ハートマン、ハロルド・ブルーム――を中心に分布することとなったアメリカ解体派だが、少なくとも一九六〇年代後半に関する限り、前掲雑誌を核に理論的吟味にこれ務めていた、と見てよかろう。

遂に実践に移されたのは一九七一年、ヒリス・ミラーによるM・H・エイブラムス『自然的超自然主義』（M.H. Abrams, *Natural Supernaturalism*, 1971）の書評を以て嚆矢（こうし）とする。それは、ミラーの内部においてはプーレからデリダへの宗旨変えであり、人本主義的伝統に巣喰う言語／意味への幻想――言語を指示的と捉え意味の決定可能性・回復可能性を信じる見方――の解体に他ならない。[3] かような彼の姿勢は、当然ながら最近ベティ・ジーン・クレイグの『文学と相対性原理』（Betty Jean Craige, *Literary Relativity*, 1982）でも指摘があったような、ポスト・モダンの時代において諸学・諸芸術に通底する不確定性原理を解体批評にも特徴的に見取ったものだ。最新著書『小説と反復』が示すように、起源（オリジン）の概念は反復（リピティション）の法則によって限りなく無効化されてゆく。言い直すならば、起源・目的・連続性といった西欧合理主義的・人本主義的諸概念が今日、反復・差異・連続性・開放性・個人エネルギーの自由で矛盾する葛藤・戯れ――ミラー流に言う「水平ダンス」（The Lateral Dance）――に基づく全体像の理解（実のところ誤解）によって疑問を付きつけられているのである。その立場は、更にジャンル概念の解体を企む。ミラーは、文学を宿主、批評を寄生虫と見たがるような伝統的観念を徹底的に打ちのめし、因襲的な文学／批評なる二項対立の解体を目指す。その方向を如実に表現したのが論文「宿主としての批評家」だが、大切なのはこのミラーのジャンル解体に賭ける情熱が解体派全体の共通意識に等しいことだ。ここでも従前の批評との差

異は明確になる。新批評が作者／作品を区分して作品の自律性を謳った一方、解体批評は作品／批評の区分を解体して批評芸術の可能性を夢見ようとする。

これだけでも、ミラーが極めて忠実なデリダ信奉者の一人であるらしいことは容易に察しがつこうというものだが、とりわけ彼の活動で印象的なのは、何と言っても最も早い解体批評書『逆さの鐘――モダニズムとウィリアム・カーロス・ウィリアムズの対抗詩学』の著者ジョゼフ・リデルとの間で交わされた「ミラー／リデル論争」だろう。互いの誤解・曲解も横溢してはいたが、それに目をつぶり成果にのみ着目すれば、ここにはまさしく建設的な議論があった。これによって我々は恐らく初めて、それまでヴェールに包まれていた解体批評の根本的問題を可能な限り明確な形で提示されたからだ。

端的に言ってしまえば、「ミラー／リデル論争」とは、解体批評におけるハイデガーの位置に関した「ハイデガー論争」と定義できる。リーチにならえば、それは大略以下のように進められた。まず、少なくともミラーには、リデルがハイデガー、デリダ、ウィリアムズを混同した上、古典的な「ミメシス理論」――言語と文学が外界の事物を鏡のごとく映し出せるというアリストテレス流の信念――に基づいているかのように見えたので、これに対し三者の混同をとりあえず批判しつつ、最終的にはデリダ的「テクスチュアリティ（テクスト性理論）」を対立点として設定する。ミメシス理論とは、つまるところ意味決定可能性を盲信するロゴス中心主義の典型にすぎず、今日、そのような文学・言語観は成り立たない。ミラーにとっては「いかなる外・言語的起源も目的も持たぬ無限の比喩の連鎖」こそ解体批評の範とするところである。一方、リデルから見れば、自らの方がむしろ純粋にデリダ的であって、ミラーやド＝マンの方が作者の地位回復・文学言語の価値安定を企む点で人本主義的と映る。

以上の相互誤解を抱えた論争ではあったけれども、結局明白になったのは、第一に、双方とも、テクストは間テ（インター）

クスト性を前提としテクスト内に既に自己解体的契機を含むと考える次元では共通しながら、かようなテクストの自己解体性をミラーが「全ての傑作の構成要素」と見るのに対しリデルが「モダニズム作品にはなくポスト・モダニズム作品に備わる要素」と歴史的見地から定義して喰い違いを示している点。第二に、このミメシス理論／テクスト性理論の対立というのが、実は前期ハイデガーから後期ハイデガーへの移行、つまり本体論的人間中心主義（現存在）からそれへの批判としての書字的言語中心主義（存在）への移行を孕んでいる点だ。そこには所謂デカルト的「われ思う、ゆえにわれ在り」からミシェル・フーコー（Michel Foucault）的「われ語る、ゆえにわれ消滅す」への移行がある。ロゴス中心主義は書字言語（écriture）に代替されてしまう。人間の終焉が決定し、言語の勝利が謳歌される。こう辿ってくると、リーチがあくまでウィリアム・スパノス（William Spanos）流の破壊批評（前期ハイデガー、すなわち一九二七年刊『存在と時間』にのみ立脚し、あくまで文学を存在に奉仕するものと捉えて究極的には文学史の「破壊」を企む）とデリダ流の解体批評（後期ハイデガー、すなわち一九三〇年代中期から一九五〇年後期にヘルダーリンその他を論じた詩論・言語論に立脚し、あくまで構造主義以後の眼で存在よりも書字・言語を重視、その「解体」を企む）との区別を強調しなければならなかった理由がわかってくる。

このヒリス・ミラーを正統的解体批評家と捉えておけば、残りのイェール・マフィアの分布図は極めて把握しやすい。

まず、往々にしてミラーとも近い立場と見られるポール・ド＝マン。彼も解体批評家の御多分に洩れず、「文学解釈／詩・小説の純粋文学言語との一般的区分を故意に消去」[4]することで、ジャンル概念そのものを否定し去ってしまう。ここに二項対立の成立可否自体が問われ、ド＝マン流に呼ぶところの「危機」（crisis）的状況が批評（criticism）の対象として確認される。[5] 彼によれば、「作品は、繰り返し扱われる度毎に、批評家がどんな部分で、

またいかなる手段で作品から逸脱してゆくか、そのさまを示してくれる。その過程において、我々の作品解釈も修正され、誤った見方であっても生産的なものであることがわかってくる。批評家が、自己の批評的立場にあって可能な限り『盲目』にならんとするならば、それは同時に、可能な限りの『洞察』を獲得する瞬間にもつながる」[6]のだ。つまり彼は、「盲目」によって、限りなく作者の原点から逸脱する非体系志向を指し、「洞察」によって、その（盲目の）結果、限りなく創造的な読みを行なう誤読志向を指している。こうして盲目／洞察、逸脱／創造の二項対立は危機を得て解体され、ド＝マン批評の基礎を成す『盲目と洞察』に反映してゆくのだが、その発展を捉えるためには、彼の「寓喩」概念に是非一瞥が与えられなければならない。

論文「時間性の修辞学」でも諒解されるとおり、ド＝マンの寓喩定義は独特なものだ。と言うより、彼の寓喩観こそ最も緻密なものと読むべきか。我々は通常、記号表現／記号内容を軸に、寓喩を〈一対一〉対応、象徴を〈一対多〉対応と考える。しかしド＝マンは、寓喩の世俗性に着目し、象徴が超越的・神話的に有機的世界の内で同一化（弁証法的統合）を目指すとすれば、寓喩は皮肉と同じく世俗の「時間的苦境」に置かれているがゆえに、そのぶん超越的な根源を無限に非神話化してゆく、つまり同一化よりも差異化に向かってゆく運命にあると考える。これは寓喩を一種解釈学的な見地から時間性を軸に捉え返した観点であり、神話的なるものを世俗的時空間に囚われた我々が読むことの本質――デリダ的「差延」（différance）をほぼ形容する概念――をポスト・ロマンティシズムの文脈で彼なりに再吟味した結果と言えよう。

この「寓喩」理念を十年を経過して後、より体系的に整備するに至ったのが『読むことの寓喩』である。ド＝マンによれば、全ての文学は言語の指示性／修辞性を規準とするため、テクスト内部にその二項対立を自己解体的に含んでしまう矛盾を持つ。その好例がイェーツの有名な詩行「いかにダンサーとダンスを区別できようか？」

（'How can we know the dancer from the dance?'）だ。フランク・カーモード（Frank Kermode）はかつて、この一文を「ロマンティック・イメージ」の典型として検討した。ド＝マンは目下、この一文を「自己解体的文学言語」の典型として検討している。この詩行には文字通り疑問文として「区別の仕方を教えてくれ」と問うニュアンスと、修辞疑問として「区別などできるわけがない」と自ら解答を却下するニュアンスを二重に含み、そのどちらでもあり／どちらでもない。文学言語にはかかる二項対立解体が常に前提であるからこそ、つまるところ「作者も批評家も、自己ないし他者のテクストを読みえない」[7]のだ。ここにも、不確定性原理の文学批評的応用がある。ゆえに「読むことの寓喩」とは、一定の結論をどうしても得ることのできぬこと、すなわち「読むことの究極的な不可能性を物語ってくれるもの」[8]と言い換えられる。要するに、ド＝マンとはつまるところ「修辞学的解体批評家」とでも呼べようか。

残る二名のイェール解体派は、正確な意味では「解体批評批判の解体批評家」と呼べるかもしれない。その一人ジェフリー・ハートマンがデリダ、ド＝マン、ミラーに関しては「王蛇的解体批評家（ボア・デイコンストラクター）」（boa-deconstructors）と認めながら「ブルームと私はほとんど解体批評家とは言えない。むしろ折にふれて反論を書いている」[9]と述べているからだが、それでも彼らのメタ解体批評を検討すれば、解体批評が限界とし可能性としている部分をより明確化できるのは疑いない。

まず、ハロルド・ブルーム。彼の意見によると、所謂解体批評は「文学テクスト上の言語学的・狭義の修辞学的要素を辿り直すことばかりに強調点を置くので、歴史と心理学を回避するのみならず無効化している」[10]ために、彼自身どうしても独自の詩学と解釈学を発展させてゆく必要があった。ブルームの原点はミルトンとエマソンであり、またロマンティシズムからポスト・ロマンティシズムへの途である。そこより出発して、彼は精神分析学、カ

バラ的・グノーシス的解釈学、及び古典修辞学からヒントを得た上、テクスト性、間テクスト性、そして誤読の諸理論に到達している。その結果導きだされたのが、「誤解」(misprison＝mistaking, misreading, misinterpreting)と「修正主義／創造主義」(revisionism)なるキーワードだ。

「誤解」とは、詩人間、批評家／テクスト間で必然的に起こる。なぜなら、本質的に厳密な反復ないし同一化はありえないからであり、同一性とは奴隷性及び死に価するからだ。差異こそが自由と活力の源なのである。こう考えた彼は、『誤読の地図』で「修正／創造」の弁証法を真の力学として捉えることで、詩的テクスト及びその解釈学的解読に非連続性と差異の概念を導入する。ブルームによれば、いかなる伝統においても強い詩人(自己の自我同一性を守るに充分強力な資質を備えた者)と、彼らがその影響に対処し何とか自己に利するよう転化せねばならぬ先人との間には、複合的にして魅惑的な緊張がある。それは、テクスト誤読の関係性としての緊張であり、そこから先人と後裔の間に間テクスト性が成立し、究極的には『容器の解体』で示されたような形式＝比喩の解体に至る。まとめれば、ブルームの仕事はアウェルバッハ(Erich Auerbach)、ノースロップ・フライ、バーコヴィッチ(Sacvan Bercovitch)と続く聖書予型論的な修辞学と歴史主義を発展解消させようとする黙示的解体批評と言ってよい。

最後にジェフリー・ハートマンだが、彼こそイェール解体派中、最も微妙にして冒険的な位置にある人物だろう。

彼はまず、十九世紀的批評に対しては、「アーノルド的協約」(The Arnoldian Concordat)——批評／創作を厳然と区別する観点——へ攻撃目標を定める。アーノルド的批評観に関する限り、「批評はそれ自体の確固たる創造的可能性を備えたものではなく、焦点は文学作品にのみ絞られ、結局批評の自律性、自由は望めない。」[11] 次に、

アメリカ新批評に対しては、それが一種の形式主義であるがゆえに文学言語をしか対象としないのを欠陥とみなす。このあたりは彼の『形式主義を超えて』においてよく理解されるところで、その道筋からゆくと、ハートマンの根本にも前述「修正主義／創造主義」は不可欠となる。すなわち、強調点を批評そのもの、ひいては言語そのものに移してゆく見方だ。今や、芸術言語と同じく批評言語が、詩語と同じく批評用語が論議され始めた、というところにハートマンの実感があるのである。

ここまで書けば、ハートマンにも解体批評家普遍のジャンル解体への意識が根強いことが、容易に理解されると思う。では、実際それはいかに行なわれるのか。

リーチは、解体批評の方向として、バルト『S／Z』にみられた分節化による一貫性の放棄、すなわち前衛芸術への接近と、それとは表裏一体を成すデリダ『グラマトロジーについて』(*De la grammatologie*, 1967) に代表される自作を含む批評への批評、開発に可能性を感じている。二十世紀前半ないしその三分の二がオコナー (W. B. O'Conner) の言う「批評の時代」とすれば、それ以降はレイヴァル (Suresh Raval) 呼ぶところの「メタ批評」の時代だからだ。批評テクストそれ自体が文学的創作として力を持つ。その前には、学者的批評／哲学的批評の二項対立も解体されてしまう。かような立脚点から、ハートマン自身『テクストを救う——文学／デリダ／哲学』で多様な引用を文章／絵画を問わず自由に入り組ませながら、「デリダダイズム」(Derridadaism) なる新語までまさに創造しているが、ここで留意しなければならないのは、それが決してイーハブ・ハッサンが『正しきプロメテウスの火』で試みたような実験的なものではありえないことだ。たしかにハートマンは解体批評の良き理解者である。だが同時に批判者でもあるのは、彼が最終的に「主体、意図を犠牲にし、無限の自由な戯れ及びゴンゴリズム風のテクストを受容して歴史を遊戯的かつ携帯可能な文脈と解する」[12]ことには背を向け、あくまで主体と意図を重んじて

ロゴス中心主義も否定しない点にある。また深い割れ目を作ってしまうような「運命」は決して好まず、徹頭徹尾「修正／創造」に終始する。だから、ジャンル解体の点ではノリスの見るとおりミラーと並び称される存在ではあるものの、つきつめてゆくとやはりブルーム的な部分も見えてくる。とは言え、ブルームほどにロマンティシズムの伝統に淫するところはなく、究極的には、アーノルドの見た「荒地」をポスト・モダニズムにおける黙示的な「約束の地」と捉え返してみせるだけの許容量を持つ。そして、デリダの「差延」に対応すべき彼なりの用語として――因みに、それはド＝マンの「寓喩」、ミラーの「反復」、ブルームの「修正／創造」にあたる――文字通り「不確定性」を大胆にもあてはめ、科学的認識／芸術的認識の二項対立解体すら目論む。ハートマンのメタ批評＝創造的批評の秘密は、まさにこの点にある。

3　解体されるアメリカ文学

イェール解体派の興味の核は、右に述べてきたことからも推察されるように、まさしく西欧文明批判にあったから、扱う対象も主として長く西欧の書物であった。ルソーと戯れるデリダ、プルーストを洞察するド＝マン、ハーディを反復するミラー、アーノルドを批評するハートマン、シェリーを誤読するブルーム……しかし、アメリカでこそ隆盛を極める解体批評であったから、当然アメリカ文学そのものが問題にされるようになる。

先駆的には、バルト、リカルドゥー（Jean Ricardou）といった面々が挙げられようか。しかし、その火ぶたを切った一冊としては、一九八〇年のバーバラ・ジョンスン『批評的差異――現代的読みの修辞学に関する論集』を挙げなくてはならぬ。彼女はハートマンの弟子として、最近はデリダ『散種』の英訳も出しているが、批評家としては、ハートマンとド＝マンの中間に据えるのがよい。

ジョンスンはまず「批評」と「差異」の類関性を「公平に区別すること、それすなわち彼女なりの批評の観念なのであり、そこからあらゆる二項対立――男性／女性、文学／批評、性的特質／テクスト性、元型／反復、明瞭性／曖昧性、科学／文学、統語法／意味論、等々――及びそれらに基づく三項対立に至るまでを暴きだし、その各々が欺きあう構造を突きつける。なぜなら「実体間の差異（散文／詩、男／女、文学／理論、罪悪／無垢）は実体内の差異――実体と他ならぬ実体自身との喰い違い――の抑圧に基づくものとして示される」[13]からだ。この理念からするジョンスンの解読の手際がいかに鮮かであるかは、ジョナサン・カラーもよく言及しているので詳述はしないが、わけてもメルヴィル「ビリー・バッド」を記号表現／記号内容が自己解体しあって交叉する十字架小説（crucifiction）と洒落のめしてみせるデリダダイスティックな戯れのセンス、ポウ「盗まれた手紙」に関しポウを読んだラカンを読んだデリダを更に読み、記号表現としての手紙を記号内容を欠如した構造の中の結ぼれ、探偵デュパンをその構造＝象徴的記号世界の反復・解体者とみなして象徴主義者ポウ＝デュパンの図式を提出する過程など、言語、ジャンルはおろか、文学史の解体／再構成までほんのり匂わせて心憎い限りなのである。

このジョンスンの立場を発展解消するかのように登場してきたのが、ジョン・カーロス・ロウ『税関を通って――一九世紀アメリカ小説と現代理論』だ。彼の目論見は、十九世紀アメリカ小説に二〇世紀理論を巧みに導入して間テクスト的批評の実験を行ない、十九世紀文学論の因襲、ひいてはアメリカ文学史の常識を解体しようとする点にある。具体的には、とりわけアメリカ・ルネサンスのロマンティシズム文学の中に、ポスト・モダンな文脈ともきれいに間テクスト構造を結ぶ契機をたぐり寄せようとしている。

ここに至って、前述したとおり、解体批評家のみるモダニズム以降の文学がポスト・ロマンティシズムの名で通

っているさまに鑑みるならば、事情は一層明確となるだろう。アメリカ・ルネサンスは、もともと西欧ロマンティシズムに後続していったのだから、ロマンティシズムをある程度客観視し、吟味・解体できる立場にあった。ゆえに、この時代を最初のポスト・ロマンティシズムと捉えておけば、モダニズムに至る道はまことにはっきりする。一例を挙げれば、ポウ、ホーソーン、メルヴィルからボードレール、ジェイムズ、フォークナーという流れである。西欧ロマンティシズムを、アメリカをはさんで初めてモダニズムに到達すべきものと捉えるのだ。そして、ポスト・ロマンティシズムである限り、十九世紀アメリカ小説にも当然、ポスト・モダニズムで顕在化するメタ文学の素地がある、とロウはにらむ。メタ文学、つまり自意識的文学、自己批評的・自己解体的文学の謂だが、ではそれがなぜこの国のこの時代に生まれなければならなかったのか。理由は簡単である。アメリカという国家の性質自体が、文学にもきわめて「根本的な次元でその『遅れ』を意識させ、かつ『独立』『独自性』をかつて西欧文学史にはありえぬほどに切望」[14]させたからなのだ。畢竟するところこの著者は、単にポスト・モダニズムの普遍的了解（フロイト、ソシュール、ハイデガー、サルトル、デリダ等々）を無節操に適用しているのではなく、確固たるアメリカ国民文学史上の動機を喝破した上で、解体批評に臨んでいる。その視座から、彼はソロー、ホーソーン、ポウ、メルヴィル、トウェイン、ジェイムズを作家研究史をも詳細なまでにふまえて扱っているのである。言わば、ロウの間テクスト的方法論とは、まさに解体批評的誤読と文学史的実証との間で織りなされてゆく。

その他では、例えばトドロフ（Tzvetan Todorov）系のジャンル理論をふまえてジェイムズ『ねじの回転』のテクスト分析ではラカン流鏡像理論を援用しつつ切ってみせたクリスティーン・ブルック＝ローズ『非現実の修辞学』、身体論も含む記号論によってウィリアムズ、ヘミングウェイ、ゲイリー・シュナイダーを扱うロバート・スコールズ『記号論と解釈』、作者・テクスト・読者の間で起こる言語／沈黙の問題をメルヴィルからフォークナー、カル

ロス・カスタネダに至る系譜の内に考察したブルース・F・カーウィン『小説の精神――内省的小説と語りえぬもの』が主なところだが、最後に、ジョンスン、ロウも含めてこれらアメリカ解体批評に通底し、かつこれからも台風の目を構成すること間違いない流れを指摘して、本稿を終えたい。

解体批評は、一つの契機としてさまざまな流れを触発し、覚醒させた。読者論的批評、マルクス主義批評、多元批評、解釈学、受容の美学……その内でも、精神分析批評の復活と、それがアメリカ的必然として伴わざるを得なかったフェミニズム批評の勃興は、現代批評に対してもアメリカ文学研究に対しても、目下最大の潜在的可能性を秘める。

一時代前なら、精神分析批評と言えばゲシュタルト心理学よりするリビドー理論が先に立ち、フェミニズムと言えば社会運動としての女性解放が先に立ち、ともども第一印象に難があった。けれども前掲ジョンスン、ブルックローズをはじめスーザン・ソンタグ（Susan Sontag）、ジュリア・クリステヴァ（Julia kristeva）、ショシャーナ・フェルマン（Shoshana Felman）ら昨今の女流批評家たちの見事な活躍ぶりを見るにつけ、もはやかような第一印象など封じて物言わせぬ論弁的迫力がある。その秘密を探るに、どうも解体批評との関連の内に鍵が見つかりそうなのだ。

カラーによれば、フェミニズム批評には三段階がある。それはまず、従前の男性中心的文学批評の支配に対する突破口として現われる。ハートマンは「読むこと」をして「女性観察」に例えたが、女性からすれば「被観察」を経験するに等しい。女性の経験を基軸とすれば、読書の概念は一八〇度転換されるだろう。デリダ流に言うところの「男根ロゴス中心主義（ファロゴセントリスム）」（phallogocentrism）（父権中心社会、意味統一性、起源の確実性）の解体が企まれる。次に、フェミニズム批評は、そうした性差的レヴェルに留まらず、読者意識、読者／書物／の関係を批判して

世界変革を導く政治的活動として機能する。男性／女性の二項対立が合理／情緒、真剣／浅薄、反省的／無意識的の二項対立に適用可能とする素朴な図式はことごとく打破されてゆく。第三に、かような男根ロゴス中心主義の世界を覆した後、なすべきことが明らかにされる。それは別段「合理を非合理に転換したり、換喩を隠喩より重視したり、記号表現（シニフィアン）を記号内容（シニフィエ）に優先させたりすることではなく、男性中心世界の産んだ概念をより大きなテクスト体系の一部としてしまえるような批評形式を発展させること」[15]に尽きるのだ。精神分析が性差の問題から読みの解体をもたらす——既にデリダの内にかような志向が見られたことを考え合わせるならば、現代アメリカという時空間を得て着実に体系化しつつあるフェミニズム批評が解体批評解体の批評として創造的批評を確立するのも、さほど遠くないことかもしれない。

（1）表題の「危機」は、文字どおり現状を懸念するという逐語的意味と、第二節で略述するポール・ド＝マン流解体批評における修辞的意味とをかけ合わせたかたちで用いられている。また、副題の「解体派」は“deconstruction”の訳語数種の内から「破壊」との区別をふまえ「脱構築」よりは耳ざわりのよい「解体」を選んで適用したものだが、ニュアンスとしてはむろん原義「解体／再構成」を一貫して含む。

なお、本稿が枠組とした批評書は次のとおり。

Jonathan Culler, *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism* (Ithaca: Cornell U. P., 1982).

Vincent Leitch, *Deconstructive Criticism: An Advanced Introduction* (New York: Columbia U. P., 1983).

Christopher Norris, *Deconstruction: Theory and Practice* (New York: Methuen, 1982).

その他、本稿で言及した主要研究書は以下のとおり。（アルファベット順）

Harold Bloom, *A Map of Misreading* (New York: Oxford U. P., 1975).

——, *The Breaking of the Vessels* (Chicago: Chicago U. P., 1982).

Christine Brooke-Rose, *A Rhetoric of the Unreal: Studies in Narrative and Structure, Especially of the Fantastic* (Cambridge: Cambridge U. P., 1981).

Paul de Man, “The Rhetoric of Temporality” in *Interpretation: Theory and Practice*, ed. C. L. Singleton (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1969).

——, *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism* (New York: Oxford U. P., 1971).

——. *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust* (New Haven: Yale U. P., 1979).

Jacques Derrida, "Structure, Sign, and Play in the Discourse of the Human Sciences" in *The Structuralist Controversy: The Languages of Criticism and the Science of Man,* ed. M. Macksey et al. (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1970), 247—272.

——. *Dissemination,* tr. Barbara Johnson (Chicago: Chicago U. P., 1981).

Geoffrey Hartman, *Beyond Formalism: Literary Essays 1958—1970* (New Haven: Yale U. P., 1970).

——, et al. *Deconstruction and Criticism* (New York: Seabury, 1979).

——. *Criticism in the Wilderness: The Study of Literature Today* (New Haven: Yale U. P., 1980).

——. *Saving the Text: Literature/Derrida/Philosophy* (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1981).

Ihab Hassan, *The Right Promethean Fire: Imagination, Science, and Cultural Change* (Chicago: Illinois U. P., 1980).

Barbara Johnson, *The Critical Difference: Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading* (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1980).

Bruce F. Kawin, *The Mind of the Novel: Reflexive Fiction and the Ineffable* (Princeton: Princeton U. P., 1982).

Frank Lentricchia, *After the New Criticism* (Chicago: Chicago U. P., 1980).

Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cambridge: Harvard U. P., 1982).

Joseph Riddel, *The Inverted Bell: Modernism and the Counterpoetics of William Carlos Williams* (Baton Rouge: Louisiana State U. P., 1974).

John Carlos Rowe, *Through the Custom-House: Nineteenth-Century American Fiction and Modean Theory* (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1982).

Robert Scholes, *Semiotics and Interpretation* (New Haven: Yale U. P., 1982).

(二) Lentricchia, 26.

(三) Elmer Borklund (ed), *Contemporary Literary Critics,* 2nd ed. (London: Macmillan, 1982), 416.

(四) De Man, *Blindess and Insight,* viii.

(五) *Ibid.,* 3-8.

(六) *Ibid.,* 109.

(七) Leitch, 187.

(八) De Man, *Allegories of Reading,* 77.

(九) Hartman, et al., *Deconstruction and Critibism,* ix.

(10) Leitch, 130.

(11) Hartman, *Criticism in the Wilderness,* 6-7. Cf. Norris 97-99.

(12) Leitch, 229.

(13) Johnson, x-xi.

(14) Rowe, 20.

(15) Culler, 61.